

## 協働実践研究会マレーシア KL 支部活動報告

2015年8月22日(日)にマレーシア KL 支部第5回研究会および第2回 KL ワークショップを、9月4日(金)に第6回研究会を行いました。

《2015年8月22日(日)第5回研究会および第2回ワークショップ報告》

参加者：大学教員6名、予備教育教員5名、中等教育教員2名、学生1名、  
教師養成機関教員1名、計15名

場所：マラヤ大学言語学部 Bilik Kiambang (1200—1600)

私たちの研究会は通常、理論編と実践編との二本立てです。しかし、今回のワークショップは、理論編の時間を特に設けず、全てポスター発表とディスカッション(実践編)で行いました。

発表は、招待発表1、公募発表3本です。実施形態は、①参加者：ポスター発表者の話を聞く前に各ポスター見て、コメントを貼る。②発表者：コメントを参考にしながら発表。③質疑応答やディスカッションというものです。(全体の流れはプログラム参照)

【発表概要とつながり報告】 報告者：木村

稗田氏(大学)の発表は、日本語の授業の中で、参加者同士が話し合いを通して異文化に対する理解を深める実践の報告でした。ビデオ教材を使って、教師が教えようと決めた事柄を教えるのではなく、学習者が自分で、映像の中にマレーシアとの違いを感じ取り、クラスで話し合う中で、日本を見つけていくというものです。



この実践での学習者自身の気づきは、日本にいる教師や日本人教師だとも思いつかないものかもしれません。「こういう実践報告を通して、私たち教師は多様な学習者の学びを知ることができる」ということを改めて感じました。この発表の実践は、『イマ×ココ』に掲載されたもので、本誌を読んで筆者が本発表者に当日の発表を依頼しました。また『イマ×ココ』から、「実践持ち寄り会」のを知り、今回の運営や形式を参考にすることができました。

ハニ氏(中等教育)の発表は、去年のワークショップで得たアイデアを授業に生かしたものでした。去年グループで考えた「ひらがなの教え方」を漢字の教え方にアレンジしたものです。生徒たちに漢字の書き順を考えさせ、話し合わせるというもので、中等教育の先生がシンプルな発表をされたのは、他の参加者を「次はわたしが発表しよう！」とエンカレッジしたと思います。そして、ワークショップに参加することで、「そこで学んだことを次に生かせるんだ」という気持ちになれたと考えます。

アン氏(教師養成)の発表は、一人の学習者の日本語学習を限られた時間でどうやって支えたかというものでした。この教師の悩みは、日本語が正規科目でなくなり、授業時間が削減されたことです。そこで、少なくなった日本語の授業時間を授業時間

外に作ること、外部の日本語教師と学習者をつなぐこと、学習者が自分のペースで何回も練習できるというメリットを考えユビキタスツールを活用したという報告です。

実践報告と題すると、「教師は、これを教えるためにどんなことをやったか」ということにフォーカスが置かれてしまいます。もちろん、それは、上述の2つのように教師にとって授業のアイデアとして参考になります。ただそれだけでなく、その実践の中にある「学習者の日本語」と「学習者が日本語を学ぶ意味」を教師がつなげてやる「ファシリテーターとしての教師」の姿の実践報告もまた、教師にとって参考になると思います。

この点において、アン氏の発表は、「スピーチコンテストに出たい」、「日本に行きたい」という学習者の「日本語を学ぶ意味」と「日本語」を『WhatsApp』を利用し、仲間（Cooperation teacher）を集めることで、結びつけた実践です。

続く木村(大学)の発表も、「ファシリテーターとしての教師」の姿の報告です。筆者は必修科目として日本語を3年間学習し、未だ日本語を学ぶ意味が見いだせず、日本語力もモチベーションもあがらない一人の学生の成長を支えるために何が必要かを考えています。筆者は、この学生が「自分自身のテーマ」を持っていることに気づき、半年間さまざまなアクティビティを取り入れながらも、この学生の持つ1つのテーマに寄り添ったファシリテイトを目指しました。この学生は、「自分自身のテーマ」にこだわることによって、自分の日本語力以上のタスク（参照 CEFR）をこなせるようになります。やがて、本人の「日本語」と「日本語を学ぶ意味」を結びつけ、「日系の会社で働きたい」という気持ちを持つようになっていったという報告でした。

この実践では、クラスメイトがそれぞれの「自分自身のテーマ」にこだわり、個々のプロジェクトを完成させます。この過程で、何回も発表し、母語でもコメントし合える機会を作った結果、日本語力に関係なく、すべての学生が平等な立場で、プロセスを共有できました。この過程では、何かのタスクをこなすための共同作業はありません。しかし、そのプロセスの共有化が協働学習を可能にしました。

#### 【運営委員として参加した感想】

報告者：嵯峨山

昨年に引き続き、2度目の参加で「協働」ということが見えてきたような気がしています。

前回のセミナー参加以後、仲間同士の相互的な学びを助ける授業づくりを目指し、「こんな時どうするんだろう？」と立ち止まり悩みながらやっています。今回のセミナーは比較的こじんまりとした会だったおかげか、職場のミーティング感覚でお互いに意見や疑問をぶつけあえたと思います。特にハニ氏の漢字の書き順の実践報告では、前回のワークショップで出たアイディアがまさに現場で行われていることに大変励まされ、刺激を受けました。（IBT・嵯峨山）

報告者：西

私は主に当日のカメラマンとしての委員参加でした。研究会参加者のみなさんが積極的に質問の付箋をポスターに貼ったり、発表者に質問したりしている様子はとても活気があり、撮影しがいがありました。それぞれ立場や所属団体の性質が異なる者同士ですが、学習者のモチベーションを高めたいという点でベクトルが一致していると感じました。途中休憩の時間にも、初対面の方同士で情報共有をするなど、有意義な時間を過ごされたことと思います。報告をしてくださった先生方もとてもフレンドリーで、私自身も日頃の業務では得られない発想と展開の理論を学ぶことができました。また、参加者のマレーシア人と日本人の比率がとてもいいバランスで、日本人だ

けの研究会とは違った雰囲気が進められ、それぞれの視点からの意見は相互に刺激があったのではないかと思います。(IBT・西)

【企画者としての全体所感】 報告者：木村

1) 会場：

「コの字型」に机を並べ、床にすわりました。発表があるたびに、前にいたり、後ろで座ったり、横の壁にポスターを見に行ったりと自由に動き回れました。一つの場所に座って、勉強するという会場ではなかったのも、ネットワーキングを含め5時間、苦痛なく過ごしてもらえたのではないのでしょうか。

2) 人数：

12, 3人の参加だと想定していたので、企画として成功だと考えます。

3) 空間のムード：

1)、2)が身体的、物理的によかったというだけでなく、情意面としてリラックスしたムードを生み、さらに中等教育の先生のシンプルな発表もあったため、いつも発言しない参加者からも質問や意見があったと感じました。

続いて、別名「池田ゼミ」と題された第6回研究会の報告です。

《9月4日（金）第6回研究会 報告》

参加者：池田先生、大学教員5名、予備教育教員1名、計7名

場所：マラヤ大学言語学部 Bilik GR8 (1300—1700)

内容：

- 1) 実践を共有する意味について池田先生の講義、共有の方法としての発表・論文執筆
- 2) 未完の木村の論文でディスカッション
- 3) 池田先生の協働実践研究会のセミナーの実践報告
- 4) 今後の協働実践研究会 KL のワークショップのやり方を議論

【企画者としての報告】 木村

第6回研究会は、マレーシアに出張中だった池田先生に来ていただき、実施するという贅沢な企画でした。第5回にできなかった理論編はこの日、実施できました。この第6回の良かった点は、理論編ができたというコンテンツだけでなく、UM内外の教師とじっくり議論できた点でした。違う視点で捉えた考えに、ゆっくり触れる時間となったようです。

日本と比べて、マレーシアには日本語教師が少ないため、異なる複数の視点に触れる機会は貴重です。日本語教師が少ないマレーシアにいと日本にいるときと同じような勉強や研究会活動はできません。

できるだけ日本での活動に近くなるように、第4回 KL 研究会は、2月の第8回協働実践研究会（於早稲田）の予稿集を使って、日本の協働実践研究会の学びとつながることを考えました。そして今回は、池田先生に KL 研究会に参加してもらうことによって、日本の協働実践研究会の学びともつながることを考えました。

KL 支部研究会は、マレーシアの教師たちや教師たちの学びがマレーシアで「つながる」ことをめざして活動を開始しました。今後は、KL 支部研究会という小さな学ぶ機会を日本での学びや、日本で学ぶ機会とつなぐことも目指し、小さな会での学ぶ行為が外にひらくように研究会運営活動を続けたいと思います。



企画：木村（UM） 報告：西（IBT）・嵯峨山（IBT） 編集：アン（IPKGBA）・スザナ（UM）